# 米歐土產教育展覽會を見て

文學士　多田鐵雄

去る十一月二十八日から一週間に渉つて、京橋區昭和小學校に於て催された教育展覽會を觀た。先づ第一に强く心を打つたものは、これほどの豐富な資料を僅か八ヶ月の米歐旅行の土產として集めて來られた校長服部蓊氏のなされた苦心の跡だ。一つ一つ、どれとして深い意義を持たぬものとてはない。デクロリー法のものあり、モンテソリー法のものあり、ルソー子供の家のものあり、ペスタロッチフレーベル、ハウスのものあり、インデイヴイジユアル用具ありで、殆んど凡ゆる幼稚園並びに小學校の教育に關する品目を網羅したものである。今、自分はこの展覽會から氣付いたこと、又實行したことを一つ二つ述べたい。

## （一）

先づ考へられたことは、幼稚園と小學校の聯結である。元々、幼稚園教育に從事してゐる自分としては、小學校教育に對しては門外漢であるし、その上、專門たるべき幼稚園教育に於ても淺薄な知識經驗しか持合せて居ない者故、一言もそれに就いて述べる資格はない筈だが、現在、唱導され批判されてゐる教育の諸主義と、今眼前に在る、その諸主義に基いての各種の教育品を併せ考へる時、あまりにも杓子定規的な文部省の小學校令並

びに法規が思はれるではないか。明治初年の嚴格主義、主知主義の歐洲の飜譯法規が、今にまでさしたる變更もなく在續してゐるとは、何としても矛盾ではあるまいか。幼稚園教育は之に比すれば自由に新らしい空氣を吸つてゐる。一例を取つて云ふも、幼稚園時代に午後二時まで保育を受けてゐた子供が、小學校へ上ると、當分は三時間限で放課になる。多くは指導者なしで殘りの半日以上を過す子供が、何を覺えるであらうかは自明である。その對策として、東京府の朝原氏は、放課後の子供を幼稚園又は託兒所が引受けて學習を手傳つてやつたりすることを提唱して居られる。これ實に當然すぎる程當然なる提唱であるが、この問題は、むしろ小學校教育の當事者が、もつと積極的に改革の道を計るべきではないかと思はれるのである。

（二）

次に眼に付いたものは米國兒童の作業である。陳列されたものを見るに、電車が出來てゐる。長さ二間、幅五尺程のが、細長い木材の骨組と、ボール紙の打付けとで手輕に出來てゐる。至極簡單ながら、窓もあり、運轉臺もあり、車掌臺もある車内には十脚位、子供の腰掛が坐席として据ゑられてある。側らには交通整理器も出來てゐる。即ち兒童は電車に就いて觀察を下し、之を共同作業によつて自身で製作し、最後に或ひは客となり、運轉手となり、交通巡査となり、或ひは、切符を又製作して車掌となつて、現實の社會生活を遊戯の中で味つて行くのである。この作業中心主義生活即教育主義の可否は論を俟つまでゝないが、自分がこゝで氣付いたのは（その主義自體に就いてゞはないが）いかにも規模が大だと云ふことであ

る他の室に陳列されてあつた米國の兒童の繪を見ても感じた處であるが、米國の兒童は日本の兒童に比して、大きなことを考へるのではないか。卽ち惡く云へば大ざつぱであり、よく云へば眼の付け方が大きいと云ふこと。今、自分はこゝで國民性としての米國人と日本人とに就いて、更めてその證を言及して行かうとは思はない。それは識者の夙に知る所である。が今、實際に、保姆と幼兒とを眼前に置いて考へても、保姆は幼兒を大の方に導かびないやうに思はれる。卽ち手技作業をなす場合、第一に、幼兒の奔放な着想を整理して行く任務の保姆は、知らず知らず、整へやすい細密の方向に許り進んで、幼兒の大まかな性質を大まかなまゝで指導すると云ふ方面が忘却され勝ちになるのではあるまいか。手先で器用に、電車や自動車を作るに就いては立派な方法を案出する保姆も、いきなり、幼兒自身達がその中へ入つて遊ぶことの出來るやうな、大きな自動車なり電車なりを作つて見やうとする空想は持つまい。然も、かかる空想こそ幼兒の世界獨有のものであり、この空想の實現を期する熱望を幼兒自身が諦めてしまはぬやうにし、又、その熱望を潜在から意識に引出してやつて、大きなものに眼を向かせることこそ、幼兒教育の一大意義ではなからうか。

勿論、直ちに考へられることは經濟問題であらうが、幼兒は何も完備せるものを要求はしない。たゞ一本の繩に、鈴を付けたものだけであつても幼稚の空想がそれを電車と考へ得れば、それは立派な電車であつて、その程度での製作をするとしたならば、規模の大なることは何等經濟的方面で行き詰ることはないと思はれる。

それに關聯して思ひ出されるのは先達て、手技講習會に於て卜部たみ氏が示された「市街遊び」（家を作り、ビルディングを作り、道路を作り、

並木を作り、交通機關を作り、それを實際あるやう並べて、遊びながら市街に關する知識を習得する）である。當時非常に感心したものであるが、今にして難癖を無理に付けるとすれば、以上述べた點がいくらか當てはまる處があるのではないかと思はれる。

（三）

最後にこの展覽會で見て直ちに自分の園に取入れたものがある。それはペスタロッチフレーベル會考案の、ビムビム、シテル、デイウーアである。これは各幼兒がボール紙製の時計を手にしてゐる。保姆は小さな鐘を持ち、時計の打つのになぞらへて、之を打つ。幼兒は、保姆が「さあ、今時計が鳴ります。何時を打つか、よく敎へて、打つた時間の處へ針を廻して下さい」と云ひながら打つ鐘の音を數へ、針をその數の處へ廻すのである。

保姆が幼兒に數の觀念を與へさすに就いては種々の方法があるが、多數の幼兒に同時に、而も興味を持たせつゝ指導し得る方法の優れた一つとして考へられる。これによつて數の觀念を與へると同時に、比較的日常生活に必要な時計の知識も與へることが出來るのである。些かでも參考になればと思つて、その方法を付記させて戴く。

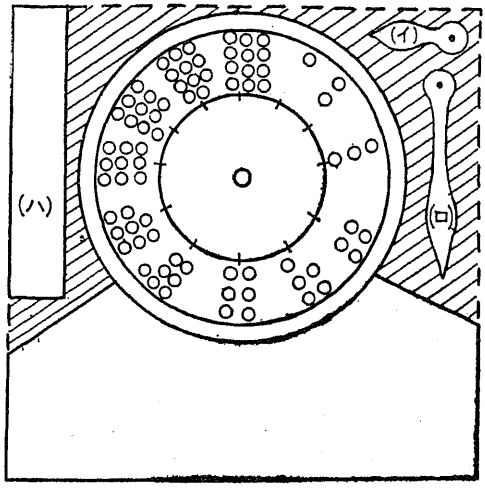
猶、展覽會に就いて述べて見たいことは多々あるがそれは又後日を期するつもりである。

（十二月五日記す）

付記

ペスタロッチ、フレーベル會考案のものは製品となつて販賣されてゐるのだが、これは幼兒自ら製作した方がいゝと思ふ。又同會考案のものは時計の時間が一から六までゝあるし、又針も短針一

つしかない。が當園の大きい組の幼兒は今は、例外なしに二十までは數へるし、實際の時計に對する觀察も可成に出來てゐる。故に製作に當つてはい畫用紙の方が切拔くに當つて幼兒には樂であるから、それでもいゝ。紙に謄寫版で次のやうに刷る。




時計は置時計の型である。時間は文字數字で表はさず黑丸で示す。(イ)(ロ)は長短針である。(ハ)はこの時計が立つやうに、後部から當てるもの。切拔き終つたら、各自に好きな色で色彩をつけさせ、白丸を黑く塗りつぶさせる。次に長短針を、開き鋲でゆるく留めさせる。

當分は長い針を十二時のところへ固定させて、おいて時間の遊びをする。(以上)

數も十二とし、針も長針、短針共に備へた。

ボール紙の最も薄い、片面白地の物を選び、八つ切から四個の時計が取れるやうにした。勿論厚